

「共に笑い 共に寄り添う ふれあいセンター」

皆さんお元気ですか

一昔前までには、この「ふれあいだより」6月号が発行される頃には田植えが始まっていたが、最近では4月中旬にはすでに田植えが終わっているのを見かけます。さまざまなことがどんどん変わっていく中で、変わらないのは太陽や月くらいでしょうか。

また、吉野中央ふれあいセンターでは、吉岡館長が退任され、私、桜井慎治がそのバトンを受け継ぎました。「清潔で利用しやすいセンター」を心がけてまいりますので、どうぞ宜しくお願いいたします。



最近、吉岡前館長が紹介された野中広務氏の著書「差別と日本人」を拝読し、私なりの考えを深めました。この書籍を通じて、差別は世界中に存在し、特に一部の人の中には、自身の優位性を信じる人がいることが示されています。しかし、果たしてそれが全ての人の考え方なのでしょうか？

野中氏は、「人は自分より劣っている人を見つけ出し、優越感に浸りたがる」と述べていますが、無理由で他者にマウントを取る人々も存在するのが現実です。私たちの社会には、多様な考えを持つ人々がいます。どのような社会を築きたいのかを考えると、誰もが平等で、困った人には手を差し伸べる成熟した街を望むものです。

また、パラリンピックで活躍するアスリートたちの姿には、並々ならぬ努力が感じられます。障害を乗り越える姿は尊敬に値しますが、彼らだけでなく、すべての人がそれぞれの苦勞を抱えています。社会全体で支え合うことが大切です。

最近、日本はインバウンド観光客にとって魅力的な国として評価されています。「日本は清潔で治安が良い」との声が上がっており、これには歴史的な背景も影響しています。江戸幕府は市中のごみ捨てを禁止し、社会的なモラルを形成しました。このような歴史が、現在の日本の清潔感や親切さを支えているのです。

いるのです。
私たちが目指すべきは、すべての人が共生し、助け合う社会です。これから、こうした価値観を大切にしていきたいと思っています。



次に、私たちの社会には、貧困や差別といった深刻な問題が存在しています。特に、貧困は子どもたちの就学や就職、さらにはその後の人生に大きな影響を及ぼします。このため、行政やNPO法人などが連携し、子ども食堂や生活用品の配布などを通じて支援を行っています。平成27年4月には国の生活困窮者支援制度が制定され、阿波市でも「暮らしサポート阿波」があり、吉野中央ふれあいセンターもその窓口として活躍しています。これらの問題は容易に解消できるものではありませんが、積極的に取り組んでいきたいと思っています。

近年、「親ガチャ」という言葉が登場しました。これは、子どもが生まれる際に親を選ぶことができないことを表現しています。まるで、オモチャの入ったプラスチックケースからランダムに出てくるように、人生の出発点は選べません。誰もが健全で裕福な家庭に生まれると思うものですが、現実には思いどおりにはいかないことが多いのです。

また、障がいを持って生まれた方々へのサポートは、普通に生まれた者としての義務であり、差別は決して許されるものではありません。

私たちは、清潔な街や公衆トイレを望む一方で、ゴミのポイ捨てのような自己中心的な行動をしてしまいう矛盾も抱えています。社会には、努力や我慢をせずにお金を得ようとして、道を踏み外す人々もいます。どの「道」を選ぶかは、その人の考え方や価値観によりますが、自分自身や周囲の人々、そして住む街を大切にすることが、私たちの未来をより良くするための第一歩です。

ぱあわーあっぷ開講式



5月22日より、今年度のぱあわーあっぷ活動が始まりました。一条小学校の児童20人が当センターで勉強や人権学習に取り組みます。私たちも見守りながら応援したいと思います。

今後も、地域の共生を目指し、差別や貧困に立ち向かうための取り組みを続けていきたいと思います。



吉野俳句同好会 作品